論　文

Online Feminism in China as Seen from Douban Groups
—Focusing on Participants in the 'BL and Misogyny Controversy'—

Jiushan JIANG

This study explores the diversity of online feminism in China and its prospects for future development, using the "BL（Boys' Love）and Misogyny Controversy" on the Chinese SNS Douban as a case study. Previous research on online feminism has primarily focused on hashtag feminism；this study, however, highlights the forum-style platform of Douban to present a different form of feminist practice.

BL, a genre characterized by female creation and consumption, has been positively evaluated as a feminist culture. However, in recent years in China, a critique has emerged from within the feminist community arguing that BL is misogynistic due to the absence of female characters and the reproduction of gender stereotypes. This research analyzes the diverse perspectives within feminism and the unique characteristics of the Douban platform through interviews with seven Douban users who participated in this controversy.

The findings reveal that while all interviewees self-identified as feminists, their assessments of BL fell into three distinct categories: advocacy, criticism, and neutrality. Notably, the participants engaged in in-depth discussions while respecting each other's divergent standpoints. Furthermore, Douban's group function provides a relatively closed space based on shared interests, functioning as a safer venue for discussing feminism compared to other SNS.

This study examines how Douban serves as a site for in-depth communication among women, rather than one-sided information dissemination, addressing needs that cannot be fully met by hashtag feminism.

豆瓣グループから見る中国のオンライン・フェミニズム ―「BL・ミソジニー論争」の参加者に対するインタビュー調査を通して―

江　九善
（関西大学大学院）

1．問題意識

インターネットの普及とソーシャルメディアの発展に伴い，オンライン空間では女性たちによるフェミニズムに関する議論がより多く，そしてより可視化されている。現在フェミニズム研究においては, Baumgardner（2011）を起点とし, オンラインでの活動が中心となるフェミニズムを「第四波」と捉える見解が主流となりつつある。オンライン・フェミニズムは，ソーシャルメディアやブログ，掲示板といったオンライン・メディアを用いて行われるフェミニズム・ムーブメントを指す（井口，2022：9）。

#MeToo 運動が注目を集めた結果，ハッシュタグ・フェミニズムを代表とするオンライン・フェミニズム研究も注目されるようになった。ハッシュタグ・フェミニズムは，個人が日常を生きるなかで経験する性差別やミソジニーについて，ソーシャルメディア特有の機能であるハッシュタグを使って発言し，人々の意識改革や問題解決を行なおうとする運動である（井口，2022）。井口（2022：9-16）によると，近年，オンライン・フェミニズムは従来の掲示板とブログなどのプラットフォームから，Twitter，インスタグラム，Facebook などのソーシャル・メディアに移行する傾向が見える。また，ソーシャルメディア上のフェミニズムの特徴としては，内容を発信すると瞬時に，広範囲の人々との情報共有や議論が可能であることだ（井口，2019）。その代表的な例が欧米から始まった #MeToo 運動である。女性たちはハッシュタグ機能を通じてセクハラや性的暴行などの性犯罪被害の体験を共有し，性犯罪が広く存在することを可視化した。特に Twitter を始めとしたソーシャルメディアで展開されたフェミニズム・ムーブメントがハッシュタグ・フェミニズムと呼ばれている。

#MeToo 運動を代表とするハッシュタグ・フェミニズムが注目を集める一方，現在のオンライン・フェミニズム研究がひたすらハッシュタグ・フェミニズムに注目することはオンライン・フェミニズムの全体像を把握しそこなっているのではないか。

2019 年の中国において，上野千鶴子の東京大学の入学式での講演が注目されることによって，上野の著書『女ぎらい』が広く読まれるようになった。『女ぎらい』が読まれたことで，この本の中心的テーマである「ミソジニー（厌女，女性嫌悪）」という概念が中国のインターネットで注目を集め，若いフェミニストの間で流行語になった。ミソジニーという言葉が流行した一つの結果として，BL や，乙女ゲーム，アニメなどの女性向けポピュラーカルチャーもミソジニー的な文化なのではないかという，フェミニズムの視点による批判を集めるようになった。本研究はこれらのう

ち，2020年頃に展開された，「BLはミソジニー的なジャンルではないか」という論争（以下「BL・ミソジニー論争」と呼ぶ）に注目する。

BLとは，ボーイズラブ（Boy's Love）の略語であり，男性同士の愛情を主体にした作品群を指す。BLは，長らく女性文化の一つとしてフェミニズムの注目を集めてきたが，ここで注目したいのは，「BL・ミソジニー論争」は，以前はBLを楽しんでいた女性による，フェミニズムの視点から展開された批判であるという点である。BLは生産者から消費者まで基本的に女性によって作られたジャンルであるため，今までフェミニズムからは肯定的に評価されてきた。しかし，2010年代の韓国においてフェミニストを中心にTwitterでBLをミソジニーの現れとして批判し，BLから脱出することを意味する「脱BL」行動が開始された（キム，2019）。その後，中国のインターネットにおいても，BLはミソジニー的な文化なのかどうかについての議論が絶え間なく続いている。

この論争が展開された豆瓣という掲示板に類似する形式のプラットフォームでは，フェミニストの間でこの論争を通じたより深い交流が促進された。本研究では，まずハッシュタグ・フェミニズムの場ではない豆瓣で展開された「BL・ミソジニー論争」に着目することによって，現在の中国オンライン空間で活躍している若いフェミニスト内部の多様性を提示する。また「BL・ミソジニー論争」に参加した女性へのインタビュー調査を通じて，中国のオンライン・フェミニズムについて，ハッシュタグ・フェミニズムだけではなく豆瓣のような掲示板機能を持つプラットフォームの重要性と新しい可能性について考察する。

2．研究背景

1）第四波フェミニズム

多くの学者は，インターネットが「第三波」から「第四波」フェミニズムへの移行を可能にしたと主張している。オンライン・フェミニズムは，ソーシャルメディアやブログ，掲示板といったオンライン・メディアを用いて行われるフェミニズム・ムーブメントを指す（井口，2022：9）。#MeToo運動が注目を集めた結果，ハッシュタグ・フェミニズムを代表とするオンライン・フェミニズム研究も注目されるようになった。Kitsy Dixon（2014）は，「ハッシュタグ・フェミニズムは，新しい方法とアイデアを組み合わせることによって，自分の信念を表明する場所を求めている女性たちが，社会的アイデンティティを共有するほかの女性とともに，コミュニティを形成しながら，社会的実在性を再定義する力を示している」と述べ，ハッシュタグ・フェミニズムが新たなフェミニズムの形成に貢献していると主張している。現在多くのハッシュタグ・フェミニズムに関する研究も，若者女性の自己表現，かつ集団的なエンパワメントにつながるかに焦点を当てている。

その一方で，ハッシュタグ・フェミニズムにも限界がみられる。例えば，田中（2020）は#MeToo運動とフェミニズムの可視性について，次のように述べている。「MeToo」という言葉を創出したのは，タラナ・バークと言う黒人女性であるが，このことはフェミニズムに関心のない人々にはあまり知られていない。彼女は自分が受けた性暴力の体験をシェアし，性暴力に耐えている若い非白人女性たちと「つながる」ための方法として，「エンパシーを通じたエンパワメント」を目標としたこのフレーズを創り出した。ただし，このフレーズが，ソーシャルメディアを横断して燃え広がりメディアの注目を集めたのは，ハリウッドの映画プロデューサーであるハーヴェイ・ワイ

ンスタインによるセクハラを告発するツイートに白人でセレブリティ俳優のアリッサ・ミラノが「#MeToo」と書き添えたからである。これを踏まえ，田中は「フェミズムがポピュラー化され，可視化される際には，「どのような女性が発言したか」をめぐるヘゲモニックな闘争がある」と述べている（田中 2020：23）。田中はハッシュタグ・フェミニズムに対して，オンライン上の女性の連帯を形成する役割を果たしている点を指摘した。またその一方で，このようなムーブメントがオピニオンリーダーに依存しすぎる傾向があり，多様な声が埋もれてしまう危険性をも論じている。つまり，ハッシュタグ・フェミニズムの場合，どのような発言であるかよりも，誰が発言するかが重要視されてしまうのである。

またオンラインでのムーブメントが現実世界に変化をもたらすかどうかについてはまだ議論が続いている。オンライン上の議論や活動が，現実世界の問題から乖離しているという懸念も指摘されている（GM Chen，2018）。

中国でも 2018 年 1 月から #MeToo 運動が始まったが，中国のインターネットに厳しい審査があるため，関連するハッシュタグは頻繁にプラットフォームから削除され，アクティヴィズムが展開しにくい状況にある（Huang，2021）。規制を避けるため，中国のフェミニストたちは「#MeToo」を英語のままで発信するのではなく，戦略的に英語の発音と近似する中国語「米兎」と表記したり，「米兎」も漢字ではなく，ご飯と兎の絵文字の組み合わせで表記したりしている（Lindberg，2021）。こうした政府によるフェミニズム運動への不寛容な態度は，社会全体にミソジニー的な言説を許容する空気を作り出す一因となっている。厳しい規制が背景にあるため，中国のフェミニストたちはオンライン空間で活動を行う場合，ハッシュタグ機能を中心に展開するだけではなく，多様なプラットフォームを戦略的に使用する傾向が見られる。

中国最大の SNS である微博は，ハッシュタグ・フェミニズムが展開される X（元 Twitter）に類似する。本稿では微博ではなく，グループ機能を持つ豆瓣に着目していく。以下ではまず，豆瓣というプラットフォームの機能に着目していく。

2）豆瓣グループの特徴

豆瓣は中国のコミュニティサイトであり，2005 年に「Douban.com」として開設され，当初は「同じ趣味を持つ友達が探せる掲示板」だったが，現在は書籍・音楽・映画のレビュー投稿，ユーザーの登録したデータに基づくレコメンド機能，ユーザー同士の交流が可能になる SNS 機能など様々なサービスを使用できるユーザー参加型コミュニティサイトとなっている。豆瓣は中国において，女性ユーザーが多いイメージがあるため，よく中国のインターネット上のアンチフェミニズムの人から「女子トイレ」だと揶揄され，攻撃される。豆瓣のグループ機能は掲示板に似ており，ユーザーはスレッドを作ったり，スレッドにコメントを書いてリポストしたりすることができる。豆瓣グループは特定のトピックに関連して設立され，そのトピックについて議論するためのグループである。グループの創設者は管理者であり，他の豆瓣ユーザーは自分の興味に応じてグループに参加することができる（熊，金，2012）。グループのメンバーは投稿やコメントなどの活動を行うことができ，情報の共有と相互作用が盛んである。一方，豆瓣は匿名のシステムではない。あるグループでスレッドを作りたい場合や，グループのスレッドにコメントしたい場合は，そのグループのメンバーにならなければならない。メンバーになるには，そのグループの管理者の許可が必要である。

このようなグループ機能を中心とするSNSは，豆瓣の他にも，中国最大の検索エンジンである百度が運営する掲示板機能「百度貼吧」がある。しかし，百度貼吧は豆瓣よりもフェミニズムに関する言説への規制が厳しく，さらに男性ユーザーがより多いという特徴がある。そのため，豆瓣のようなフェミニストにとって友好的な空間は形成されにくいと考える。

また，豆瓣グループは非常に活発な相互作用が特徴で，個人はグループ内での活動を通じて情報を得て満足感を得ると同時に，グループのメンバーから認められることで個人の自信を高めることができる（刘，2020）。メンバーは豆瓣グループを通じてオンラインと現実の生活を結びつけ，自分の考えを共有し，議論することもできる。このオンラインの相互作用はメンバーの現実世界での態度にも影響を与える可能性がある（郑，2023）。

豆瓣に関するフェミニズムの視点からの研究のほとんどは，具体的な言説についての分析であり，プラットフォームの特徴とオンライン・フェミニズムを関連付けた分析は非常に少ない。数少ない一つが谢霊（2022）である。谢は豆瓣のあるフェミニズム関連のグループを対象として６ヶ月の参与観察を行い，グループの一部のメンバーに対してインタビュー調査とアンケート調査を行った。谢は，このようなフェミニズムグループはフェミニズム思想の広がりとフェミニスト同士の語り合いを積極的に促進できる一方,「他者」の参加がないため, 考え方が単一化され, 外部からのフェミニストに対するステレオタイプを強化するリスクもあると指摘した。

一方，豆瓣で起こった「BL・ミソジニー論争」において，その論争に参加した女性たちはフェミニストというアイデンティティを持っていたが，BLはミソジニー的なジャンルかどうかについては異なる立場に立っていた。論争参加者たちは，単一の意見や共感を求めるのでなく，学術的な内容を引用し，長文を書いて，深いコミュニケーションを行っていた（江，2023）。「BL･ミソジニー論争」の事例を踏まえると，豆瓣のフェミニズムグループの考え方が単一化されているという谢の指摘は，妥当ではない可能性も高い。グループ外部の人が発言できないという特性は，女性たちが安心してコミュニケーションできる傾向を生み出しているのではないか。そこで，本研究では，この論争の参加者にインタビュー調査を行うことによって，豆瓣のフェミニズムグループの特徴を改めて考察することにした。ハッシュタグ･フェミニズムの場ではない豆瓣での「BL･ミソジニー論争」の参加者にインタビューすることによって，中国のオンライン・フェミニズムをより全面的に把握できるのではないかと考える。

表１　中国の代表的なSNSの特徴

SNS名称	微博	豆瓣	We Chat	RED
SNSの特徴	中国最大のソーシャルメディア	グループ機能を持つコミュニティサイト	中国最大のチャット系SNSタイムラインの機能を使うとテキストや写真を他のユーザーと共有できる	中国の若い女性に人気なSNS
類似の日本SNS	X（元Twitter）	知恵袋とIMDbの結合	LINE	Instagram

3．研究方法

本研究では，豆瓣のグループで「BL・ミソジニー論争」に参加した女性たちはなぜオンライン空間で熱く議論したのか，またなぜ豆瓣を使用したのかを考察するために，豆瓣で「BL・ミソジニー論争」に関するスレッドを作った人を対象として半構造化インタビューを行った。

筆者が「BL・ミソジニー」論争の研究に着手した 2021 年 11 月末の時点で，豆瓣で「耽美（BL）」と「厌女（ミソジニー）」という 2 つのキーワードを入力すると，この話題に関連する 834 のスレッドが見つかった。ただし，既に閲覧できなくなったものも数多く，その時点で閲覧可能なスレッドは 429 だった。2022 年には，審査や規制によって，豆瓣における数多くのフェミニズムに関連するスレッドが削除され，「BL・ミソジニー論争」に関するスレッドは 117 しか残っていなかった。インタビューを依頼するために，2022 年 7 月から 11 月までの間に，コメントが多くついたスレッド（コメント数 50 点以上）の投稿者 14 人にダイレクトメッセージを送った。そのうち 4 人の返信がなく，3 人がインタビューを断ったため，結果として 7 人に We Chat の電話機能を通してインタビューすることができた。この 7 人は主に「古怪问题中心（おかしな質問センター）」，「小说打分器（小説採点ツール）」，「Woman in Lit 女性文学创作者的房间（Woman in Lit 女性文学創作者の部屋）」などのフェミニスト友好のグループで発言した経験を持つ。また 2023 年 11 月から 2024 年 1 月の間に，7 人のうち 3 人に対して 2 回目のインタビューを行った。2022 年の時点において，7 人のうち 10 代が 1 人，20 代が 5 人，30 代が 1 人であり，そのほとんどが学生であった。インタビューは，約 0.5 ～ 1.5 時間実施した。具体的な属性を表 2 に示す。

表 2　分析対象者の基本属性

	立場	年齢（2022）	職業	居住地	調査日	時間
A	BL を擁護する側	21	大学生	上海	22/07/28	29 分
B	その他	19	大学生	福建	22/09/22	27 分
C	BL を擁護する側	21	編集者	江蘇	22/08/23	49 分
					24/01/26	37 分
D	その他	22	大学院生	江蘇	22/09/23	95 分
					23/11/17	37 分
E	その他	21	大学生	湖北	22/10/05	31 分
					23/11/28	29 分
F	BL を批判する側	21	大学生	湖南	22/10/06	67 分
G	BL を批判する側	28	無職	遼寧	22/11/17	66 分

4．研究結果

先行研究（江，2023）では，「BL・ミソジニー論争」についてのテキストデータ分析に留まっており，論争に参加した当事者の声は十分に捉えられていない。本章では，このギャップを埋めるため，当事者へのインタビューを通じて，彼女たちが豆瓣グループをいかに能動的に利用し，自らの居場所を形成したかを考察する。

1）フェミニズムとミソジニーに対する多様な見解

江（2023）は，豆瓣のスレッド内容の分析を通じて，豆瓣の女性ユーザーたちがBLをミソジニーだと批判するロジックには主に以下の4つのパターンがみられることを明らかにした。①女性キャラクターの不在と表面化，②「攻め / 受け」関係をめぐる批判，③男性を美化するという批判，④BL作品のドラマ化によって，女優の仕事環境が厳しくなるという批判である。同時に，フェミニズムの立場からBLを擁護する，つまりBLはミソジニー的なジャンルでなく，むしろBLはフェミニズム的なジャンルだと主張するコメントもみられた（江，2023）。

インタビューでも，BLはミソジニーであると考えるかどうか尋ねた。批判派であるFさんはスレッド内容の①と同様の視点からBLを批判した。

F：私が思っているミソジニーとは女性の主体性が消失することだ。BL小説の中では，二人の男性の物語しか見られず，仮に女性キャラクターが登場しても，彼女たちは常に批判されている。さもなければ，主人公の女性の友人として登場する。総じて，主体性がなく，女性を完全な人間として見ていないことがミソジニーだ。

一方，擁護派であるAさんはBLの男性キャラクターに注目して，BLはミソジニー的なジャンルではないと説明した。

A：簡単な例を挙げると，一般的なBL小説の男性キャラクターは美しくて綺麗である。しかし，綺麗というのは通常，家父長制が定義する典型的な男性の外見とは異なっている。だから，そこにある種の反抗心や家父長制の衰退を読み取ることができるのではないかと思っている。

同じくBLの擁護派であるCさんは，BLがミソジニー的なジャンルであるかどうか，あるいは特定の作品がミソジニー的な内容に関わったかどうかに関係なく，女性が自身の観点を発表し，執筆する行為はまず擁護すべきだと主張する。BLは基本的に女性が創作し，消費する特殊な文化であるため，Cさんは「BL・ミソジニー論争」においてBLを擁護する立場を堅持している。

以上のように，インタビュー対象者は単純にBLを攻撃したり，BLのファンであるためにBLを擁護したりしているのではなく，フェミニズムの視点から議論を行おうとしている ことがわかる。実際，インタビュー対象者に，あなたはフェミニストかと尋ねたところ，全員がフェミニストであると主張した。

また，インタビュー対象者は全員フェミニストであるにもかかわらず，BLがミソジニーかどうかについては異なる意見を持っていた。その一方で，インタビュー対象者は意見の多様性を尊重していた。三節で述べたように，インタビュー対象者が投稿したスレッドには，すべて50件以上のコメントが寄せられている。つまり，彼女たちが豆瓣グループで自分の観点を投稿した後，多くの女性ユーザーからのコメントを得たことを示している。この状況について，インタビュー対象者全員が，自分を批判する人々のフェミニストとしてのアイデンティティを尊重すべきだと述べた。

また，インタビュー対象者たちはBLがミソジニーかどうかについてだけでなく，ミソジニーという言葉や，フェミニズムに対する理解についても答えてくれた。例えば，Cさんはミソジニーについて，次のように述べる。

C：ミソジニーの定義は非常に広くて，一度に説明するのは難しいと思う。根本的には家父長制による女性全体に対する抑圧を指しており，この抑圧はシステム的なものだと思う。BL というジャンルがミソジニーだと指摘される現象は，あくまでこのシステム的な抑圧がポップカルチャーに現れた一つの形態だ。

また，フェミニズムについて述べるなかで，インタビュー対象者全員がフェミニズムの多様性の重要性を肯定し，ただ一つの定義にすべきではないと主張した。一人一人が思っているフェミニズムは実は異なっている可能性もあり，このような多様な観点と体験は尊重すべきであることが述べられた。

2）論争に参加した理由

そもそもインタビュー対象者はなぜ「BL・ミソジニー論争」に参加したのだろうか。論争に参加した理由と，BL はミソジニー的なジャンルだという批判に対してどう思うのかを尋ねた。

まず C さんは自ら小説を書いた経験から，中国のオンライン空間で様々な女性向け文化がミソジニーだと批判される状況に対して，当時強い怒りを感じたと語った。

C：女性が執筆を始め，自己表現を始めるなら，いくら非常識や不道徳な内容，あるいは非常にミソジニー的な内容を書いたとしても OK だ。重要なのは，書き始めて，主導権を握って，そしてある領域で優れた成果を上げること。例えば，BL はサブカルチャーからどんどんメインになって，これはとても素晴らしい成果だと思う。もちろんそれがミソジニーであるかどうかを議論したり，批判したりはいいと思う。でも一番重要なのはこのジャンルが，女性がある領域の主導権を握るための役割を果たしていることだと思う。

また，D さんは BL に対して批判する立場でも擁護する立場でもなく，ミソジニーだと批判する場合は具体的な作品について論じる必要があると主張したうえで，次のように述べた。

D：だから先に言ったように，私はどっちも応援していない。私がそのスレッドを投稿したのも，女の子たちが自分の観点に立って，動揺しないでほしいというのが最初の目的だった。

D さんがスレッドを投稿した理由は，D さんのようなフェミニストであると同時に BL も読んでいる女性ユーザーが反省している姿を見て，グループの中の女性たちに反省しないように呼びかけたかったからだという。また D さんは，BL 作品にミソジニー的な内容が含まれていることを否定しないが，現在の社会環境では完全にミソジニーでない作品は存在しないため，特に BL を批判する必要はないと考えている。

D：本当に批判したいなら，生活の中のすべてのことがミソジニーだ。そして，事実であることを繰り返し議論することに意味はないと思う。私たちは家父長制の中で暮らしており，女性たちはそもそも差別的な視点によって見られている。これが既知の事実であり，それを繰り返し議論することの意味はなんだろう？これはミソジニーであり，あれはそうではないと議論することは本当に無意味だと思う。

以上のようにDさんは，インターネット上で頻繁に使われる「ミソジニー」という言葉は結局女性を批判するために使われていると指摘した。

D：自分がフェミニストであることをはっきりと認識していれば，それで十分だ。自分が完璧なフェミニストでないと言う必要はない。これは「完璧な良い女ではない」と言うのと何が違うのか。せっかく男あるいは家父長制の束縛から解放されたのに，再び「フェミニスト」という新しい束縛に陥る必要はない。女性として自由に生きることが一番大切だと思う。

Dさんは，フェミニストという言葉の前に，何らかの形容詞をつける必要はないと主張した。フェミニストが自分の行動がミソジニーかどうかを反省し，それによって「完璧なフェミニスト」であるかどうかを判断することは妥当ではないと指摘した。上記から，インタビュー対象者はBLがミソジニーであるかどうか，そしてBLがミソジニーだと問題視されることに対して強い関心を持っていることがわかる。

3）SNSの使用傾向

これらの議論はなぜ他のプラットフォームではなく豆瓣で展開されたのだろうか。第一に，豆瓣グループでフェミニズムについて語る場合，他のプラットフォームより攻撃されにくいという意見がみられた。インタビュー対象者の中には，微博あるいはBilibiliで攻撃された経験を持つ人がいた。Bilibiliは主にアニメやゲームなどのコンテンツが豊富な中国動画共有プラットフォームであり，機能はニコニコ動画と似ている。例えばCさんは中国の動画サイトBilibiliで，趣味の映画解説動画を定期的に投稿している。一度，彼女が投稿でフェミニズムに関する内容に触れたとき，コメント欄に男性からの攻撃的な発言が書かれたことがあったが，Cさんは無視したという。

Cさん：コメントは基本的に「お前も女拳だね」のような内容なので，返事しても意味がないと思う。そもそもその人はコミュニケーションがとれない人だから。

「女拳」とは，「女権」と同じ発音で，フェミニストを批判する際に使われる言葉である。また，同じようなフェミニスト同士あるいは女性同士の方が語り合いやすいから豆瓣を選んで投稿したという意見もある。具体的な内容は以下のものである。

A：女性だと，スレッドでのように，お互いに自分の意見を言い合う。たまに完全にロジックがない人はいるけど，基本的に議論はできる人が多い。でも男だったら無視するか，あるいは本当に腹が立つ時はお互いに罵るしかない。

B：アンチの人と話したくないなー，あんまり意味ないと思う。多分わたしが何を言っても相手の考え方は変わらないから。

また，Gさんはサッカーファンであるため，よく男性ユーザーが多数を占めるサイトを使用している。Gさんがそのサイトで発言する場合，いつも自分は女性であることを他人に知られないように気をつけている。また，他人の投稿をコメントしようとするときにも，先に相手の性別を判断する習慣があると答えた。

G：私はサッカーが大好きだから，サッカー関連のフォーラムをよく見る。そのときまず無意識的に相手の性別を判断している。あなたが共感できるかどうかがわからないけど，よくあるじゃない，その発言を見るだけで，ああ，この人は100%男だと思う瞬間はよくあるよね。

以上のように，フェミニストたちは豆瓣グループにおいて，自分のフェミニストアイデンティティを確認して，他の女性と話し合うことを通して共感を求めているだけではなく，安心して発言できる空間を追求していることがわかる。

そして，他のSNS使用経験を通じて，プラットフォームがオンライン・フェミニズムに与える影響について整理する。まず，インタビュー対象者のうち全員が微博のアカウントを持っていたが，全員が微博でフェミニズムに関連する内容を発信しているわけではなかった。例えば，Dさんの場合，微博でフォローしてくれる人は大体フェミニズムに関心を持たない人や，日常生活の知り合いが多いため，リポストとしても意味がない，逆にフォローしてくれる人もそれを見たくない，だから微博でフェミニズムについて語らないと答えた。Dさんのように，微博のような社交性の強いSNSでは，自分のフォロワーのフェミニズムに対する態度を考慮して，フェミニズムに関する内容を避ける女性ユーザーがいる。微博と同じく社交性の強いSNSとしてWe Chatもあるが，We Chatのタイムラインでフェミニズムに関連する内容をシェアする経験があるかどうかを尋ねたところ，Cさん，Dさん，Eさん，Fさんは共に「身近な知り合いが多すぎる」という理由で，タイムラインにはフェミニズムに関する話題を投稿しないと答えた。

微博やWe Chatのタイムラインと比べて，豆瓣のユーザーホームページはユーザーのプライバシーを保護している。これによって豆瓣は社交性を制限する一方で，共通の興味に基づいたグループで，誰が投稿したかではなく，より内容に焦点を当てたコミュニケーションを可能にしている。これについてAさんは次のように述べていた。

A：微博はあんまりつかわないよね。微博で一番時間を使うのはホームページのおすすめ欄を読むこと。そして，私がフォローしている人はそういうオピニオンリーダーみたいな人はほとんどいなくて，素人のブロガーで，ファンは数十数百人しかいない人がメイン。（略）実際一番使っているのは豆瓣，なぜかというと豆瓣のホームページのユーザープライバシーがより強いから。

またハッシュタグ・フェミニズムに参加した経験について聞いたところ，Eさんは以下のように答えた。

E：微博で関連ニュースをリポストしたことはあるけど，それだけかな。コメント欄はやっぱどんな人もいるから，攻撃される可能性もあるし。

Eさんと似た答えであったBさんはフェミニズムに関する内容をリポストした経験があるが，自分がリポストしたハッシュタグが削除された経験もあるため，ハッシュタグ・フェミニズムに対する参与感は薄かったと述べた。

4）フェミニストとしての自己認識と自身の成長経験

本章の第一節で述べたように，インタビュー対象者は全員，自分をフェミニストだと自認していた。本節では，インタビュー対象者が，どのようにフェミニズム思想に触れたのか，そしてなぜ自分がフェミニストだと思うのかについて論じていく。

まず，全員がインターネットを通じてフェミニズム思想に触れたことがわかった。そして，全員は上野の講演を観たことがある。その中に，C さんと G さん以外の人は上野の講演の影響で，ミソジニーという概念に触れたがわかった。またフェミニズム思想に直接出会った人もいたが，作品を通してフェミニズム思想に出会った人もいた。例えば A さんは BL 作品を読んだことをきっかけに，フェミニズム思想に出会っている。

A：思い出した，たぶん BL を読んだことがきっかけです。なんか耽美を読む人って，ゲイを応援する人が多いイメージがあって，それでゲイについて検索してみたら，LGBTQ に関連するものが出てきました。それがジェンダーやフェミニズムの内容に触れた経緯かな。

A さんに，フェミニズム思想に触れた後，どのように自分がフェミニストだと自認したのかを尋ねた。

A：私は，家父長制的な環境に生まれ育てきた女性は，二つの結果しかないと思う。一つはフェミニストになる，もう一つはフェミニストという存在をまだ知らないことです。なぜなら，自分の権利を守ることは，とても自然なことだからです。（略）人間である以上，平等な権利を求めるのは当然だと思います。尊厳のある平等な生活を送りたがる女性であれば，間違いなくフェミニストになるはずだと思います。
（略）私は一人っ子だから，両親はどちらかというと平等な両親だと思う。ただ，父は時々，女の子は「こうしてはいけない」，「ああしてはいけない」のような性別の規範を押し付けてきました。そして学年どんどん上がることにつれて，先生が「男の子（の成績）はあとから追いつく」とか「男の子の数学の成績はすぐ伸びるから」と言われて，ものすごく腹が立ちました。その頃はまだフェミニズムに出会うことがなく，この感情の解釈に対しては空白のままでした。それでフェミニズムに出会ってから，この怒りが明確に整理できるようになりました。

インタビュー対象者の中で最年少の B さんは，フェミニズム思想に触れる前から豆瓣をよく利用していた。豆瓣は女性ユーザーの割合も，フェミニズム関連のグループも多く，B さんは豆瓣を使っている間に自然にフェミニズム思想に触れ，そしてすぐに自分をフェミニストだと認識したという。

また D さんの場合，大学に入ってから自然にインターネットを通じてフェミニズム思想に触れた。D さんはフェミニストという自認を得ることは自然な過程だと述べた。

D：うん，とても自然な過程だから，逆に答えにくいかも。食事や睡眠と同じように，女性が自分の権利を追求するのは当たり前のことです。

本研究では，3 人に対して 2 回目のインタビューを行ったが，D さんは 2 回のインタビューの間に，

就職活動を経験している。彼女は就職活動の経験によって，フェミニスト同士で話し合うことに対する考え方が大きく変化した。1回目のインタビューでは，「完璧なフェミニストにならなくてもいい」と強く主張していた彼女だったが，2回目のインタビューでは，インターネット上のフェミニズムに関連する議論のほとんどに無関心な態度を示すようになっていた。その理由は，就職活動中に，性別による不公平な扱いを多く経験したことが原因で，身近な人以外とはフェミニズムに関する話題をあまり話さなくなったと述べた。

D：就職の時よく「彼氏いますか？」と聞かれて，「います」と答えたら，次の質問で「結婚の予定は？」「何年以内に結婚しますか？」って聞かれるんです。そして結婚するかどうか，あるいは彼氏がいるかどうかという行動をもとに，勝手に私の人生を推測してくるんです。

Dさんは女性がこのように差別される環境について，同じ専攻に所属する女性に愚痴を吐いたところ，相手から共感してもらえなかったという。このことで，以前は積極的にフェミニズムについて発言していたDさんが，フェミニズムを語ること自体に対して消極的になった。

本節のAさんとDさんの語りからも，中国には性差別がまだ多く存在することと，現実世界では周りの女性とフェミニズムについて語りたいが，語れない困難さが存在することがわかる。このような困難や，不安や迷いのなかで，オンラインで自分と同じようなフェミニストアイデンティティをもつ女性とコミュニケーションしたいという欲求が生まれ，それが豆瓣での「BL・ミソジニー論争」を発展させたのではないか。

5．おわりに

本研究はオンライン・フェミニズムについて以下の二つの視点から出発した。第一に，ハッシュタグ・フェミニズム以外のオンライン・フェミニズムの可能性について検討する必要があるという点である。#MeToo運動が大きな成功を収めたため，オンライン・フェミニズムに注目する際に，ハッシュタグ・フェミニズムに関心を寄せる傾向が見られる。ハッシュタグ・フェミニズムが主に展開されるのは，Twitterや微博のような社交性の強いプラットフォームである。プラットフォームの機能の違いにより，Twitterや微博では，どのような発言をしたかより誰が発言したのかが重要視されることがある。

インターネットの発展に伴い，女性のメディアへの参加がより可視化された。既存の主流メディアの生産者に占める男女比率は極めて偏っていたが，インターネットの空間では，多くの女性たちが比較的自由に発言しているように見える（田中，2013）。現在の中国のオンライン空間では，ジェンダーやフェミニズムに関する話題はとても注目されている。第二章の第二節で述べたように，豆瓣はアンチフェミニズムの人々から「女子トイレ」だと揶揄されることがある。この蔑称によっても中国のオンライン空間でのフェミニストに対する攻撃が非常に激しいことがわかる。中国では，フェミニズム的な言説が政府の検閲と抑圧に直面しており，これにより，反フェミニズム的な言動が公的なオンライン空間で蔓延しやすい状況が生まれている。このため，男性からのミソジニーは，露骨な攻撃性を伴って顕在化する傾向がある。

本研究のインタビュー対象者にも，アンチフェミニズムの人から攻撃された経験を持つ人が複数

いた。そのため，フェミニストたちにとって，豆瓣のような攻撃されにくい空間が存在していることは非常に重要だと考える。

確かにハッシュタグ・フェミニズムは瞬時性と広範な拡散という特徴を持ち，フェミニズム関連の内容を短時間でより多くの人々，さらにはフェミニズムに関心のない人々にも伝えることができる。その一方で, 瞬時性と広範な拡散という特徴を持たず, オピニオンリーダーではなく内容によって人が集まる豆瓣は，オンライン・フェミニズムの一つの可能性を示しているのではないか。

第二に，中国ではこれまでのところ，豆瓣というプラットフォームのグループ機能に関するフェミニズム研究はまだ少ない。数少ない研究の一つである谢は豆瓣のフェミニズムグループはフェミニズム思想を広げ，フェミニスト間のコミュニケーションを促進する役割を果たしている一方で，グループの閉鎖性のために議論が非常に単一的で，深みが欠けていると指摘した（谢 ,2022）。谢は，豆瓣のフェミニズムグループを均質化された空間と解釈したが，本研究では「BL･ミソジニー論争」の参加者たちが，フェミニストと自認しながらも，BL という女性向けのポップカルチャーに対して異なる観点を持っていることを明らかにした。

そして，GM Chen（2018）がオンラインでの議論や活動が現実世界の問題から乖離していると指摘した一方，本研究を通して，オンラインでの議論すること自体の重要性が提示された。特に中国では，授業や教科書を通してフェミニズム思想に触れる機会は非常に限られているため，若い女性たちはインターネットを通してフェミニズム思想に触れ，そしてインターネット上でフェミニズムについて議論している。インタビューを通して，自分と同じようなフェミニストアイデンティティを持っている女性とコミュニケーションしたいという女性たちの欲求は非常に強いことがわかった。そしてこのコミュニケーションの過程においてフェミニスト同士で意見が異なることがあっても，フェミニズム内部の多様性を重要視すべきだという意見を持つ人が多かった。ハッシュタグ・フェミニズムだけでは，このような女性同士で深いコミュニケーションを取りたいという強い欲求を十分に満たせないのではないか。

これからのオンライン・フェミニズム研究も，ハッシュタグ・フェミニズムだけでなく，豆瓣のような様々なプラットフォームで展開される様々なフェミニズムにより注目する必要があるだろう。

また，インタビューでは中国のフェミニストたちが様々な SNS を使用し，プラットフォームの機能やユーザー層に応じて，フェミニズムに関する発言内容を柔軟に調整している傾向が見られた。SNS はフェミニストたちが互いに出会い，ムーブメントを展開し，そしてコミュニケーションを取る「場」としての役割を果たす。豆瓣に限らず，今後より多くのプラットフォームがフェミニストたちにさらなる「場」となることを期待する。

参考文献

- Baumgardner, J.（2011）“Is there a Fourth Wave? Does it Matter?”, *F'em : Goo Goo, Gaga, and Some Thoughts on Balls*. Seal Press : 243-252.
- Courtney E. Martin, Vanessa Valenti（2013）*Fem Future Online Revolution Report*.
- GM Chen（2018）“Hashtag Feminism : Activism or Slacktivism?”, *Feminist Approaches to Media Theory and Research* : 197-218.
- Huang Chang-Ling（2021）“#MeToo in East Asia : The Politics of Speaking Out”, *Politics & Gender*, Volume 17, Issue 3 : 483-490.
- Kitsy Dixon（2014）“Feminist Online Identity : Analyzing the Presence of Hashtag Feminism,” *Journal of Arts & Humanities* 3, no.7（July, 2014）: 34-35.
- Lindberg Frida（2021）“Women's Rights in China and Feminism on Chinese Social Media”, *Institute for Security and Development Policy*. https : //bit. ly/3rTg4ro
- 荒木生（2019）「フェミニズムの新しい潮流――「第 4 波フェミニズム」」,『常民文化』（42）: 43-55.
- 井口裕紀子（2017）「ウィメンズマーチにおけるソーシャルメディアとクラフティヴィズムスタ」,『同志社グローバル・スタディーズ』, No. 8 : 75-92.
- 井口裕紀子（2019）「ハッシュタグで繋がるフェミニズム：第四波フェミニズムにおけるソーシャルメディアとインターセクショナリティ」,『同志社アメリカ研究』,（55）: 57-74.
- 井口裕紀子（2022）『SNS フェミニズム――現代アメリカの最前線』, 人文書院：9-16.
- キム・ヒョジン（2019）「フェミニズムの時代, BL の意味を問い直す 2010 年代韓国のインターネットにおける脱 BL 言説をめぐって」, ウェルカー・ジェームズ編『BL が開く扉 変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社：47-76.
- 江九善（2023）「中国のインターネットにおける「BL・ミソジニー論争」に関する考察」『日本ジェンダー研究』No. 26 : 121-134.
- 田中東子（2013）「オンライン空間と女性たちによる表現文化の分析可能性」『マス・コミュニケーション研究』, No. 83 : 75-93.
- 田中東子（2020）「可視化されるフェミニズム：ポリティクスとエコノミーのはざまで」『三田社会学』, No. 25（2020.11）: 15-29.
- 刘思飞（2020）「浅析以豆瓣小组功能为基础构建的网络社群」, 山西青年, 2020 年 08 月（下）: 10-11
- 谢灵（2022）「互动仪式链视域下女权群体社区传播研究――以豆瓣 “ 她说 ” 小组为例」, 四川外国語大学修士論文 .
- 熊回香, 金晓耕（2012）「Web2.0 环境下信息组织的优化研究――以豆瓣网为例」,『现代情报』32（4）: 19-24.
- 郑正（2023）「凝视理论视角下的女性生育观话语研究――以豆瓣 “ 生活组 ” 为例子」, 上海外国語大学修士論文 .